「巻き込まれ親父の警護」

作　藤次郎政秀

●プロローグ

ＨＧの経営する碇屋エージェント派遣部門の初仕事は、結果的には、フェリー埠頭の事件（［巻き込まれ親父の突入］参照）での人気歌手ＩＭ達のツアー一行の奪還任務になったが、本来の依頼は人気歌手ＩＭの海浜アリーナでのコンサート中の身辺警護である。

この任務も完遂したが、この警護任務の元になった人気歌手ＩＭの海浜アリーナでのコンサートの爆破予告は、フェリー埠頭の事件で逮捕されたＣ国の反政府組織の工作員の一人がＩＭのファンで、Ｆ県領地の港からフェリーで帝都に護送される組織幹部の一人である大使と同じ船にＩＭのツアー一行が乗り込むことを知り、大使の身柄を奪還してＣ国に送り届ける任務を負った自分が参加する作戦に、ＩＭを巻き込みたくない一心で、彼女を同じフェリーに乗せたくないためだけに、ＩＭの所属する芸能事務所に送った脅迫状であった。

それが、ＩＭの所属する芸能事務所○×エージェンシーのＭＫ社長の海浜アリーナでのコンサート優先の儲け主義には通用せず、また、ＭＫ社長がＩＭの警護依頼を、かの大使をＦ県領地の事件（［巻き込まれ親父の反撃］参照）で確保したＨＧ達とは知らずに、Ｆ県領地の事件後に開業した碇屋にするとは、運命の皮肉である。（ご都合主義とも言う(笑)）

ＨＧはＨＹの一件（［巻き込まれ親父の膠着］参照）以来、自分の弟子のＴＹ、ＩＹ、ＩＡの親達と話をして、ＨＧの所に居るのに親が承知している事を確認するとこにした。

ＨＧは電話で各自の両親とアポイントを取り、その結果により、ＨＧが電話や親元を訪れ、弟子本人と碇屋と白山亭での仕事について説明をし、危険な目に遭う事についても隠すことなく話をした。

ＴＹの場合は、父親自ら白山亭を訪れ

「我が家は、先祖代々皇王家に仕える軍人の一族でして、自分が娘に大学院への進学を諦めさせ、また就職も地方銀行ではなく、軍への入隊を勧めたのに、軍に入らず民兵会社に就職すると決めた時と、挙句に何が不満で民兵会社を退職してＨＧさんの会社に入ったかについては、娘とよく話し合っています。ＨＧさんの事は娘から良く聞かされています。父親みたいに頼りになる人だと…危険な任務がある？…それは大いに結構！武門の誉ですな！ですので、自分は安心して娘を預けますので、宜しく使ってやってください」

と言った。それを聞いたＨＧは

「（娘の気持ちを考えてないなぁ…）」

と思った。

ＩＡの場合は、ＨＧとＩＡが実家に行った。実家は運送会社で、子供の頃から会社の駐車場で整備士の叔父が行っているトラックの点検を見て育ったとの事で、ＨＧは「（それで、大型免許とか持っているんだ）」と納得した。ＩＡの両親は

「とにかく、要領が悪くドジな娘ですが、宜しくお願いします」

とＨＧに頭を下げた。

ＩＹの場合は、実家は貴族階級のＢ侯爵家なので、ＨＧが電話でＢ侯爵と話したときは、

「あれ（ＩＹ）は、家を出た身ですので、当家とは関りがありません。御存分に」

と言われた。それをＨＧの隣で聞いていたＩＹが悲しそうにしていた。

●警護依頼

芸能事務所○×エージェンシーのＭＫ社長から電話があった。

「はい、碇屋ＨＧです…はい、ＭＫ社長毎度お世話になっております…はい？…わかりました。明日１０時に伺います。はい、失礼します」

ＭＫ社長から警護依頼の電話であった。
「准尉、今の電話。芸能事務所〇×エージェンシーからですよね」
ＨＧが通話を切ると早速ＨＹが嗅ぎつけてきた。
「そうだ、今度もＩＭさんの警護依頼だ」
とＨＧが答えると、ＨＹは
「今度は、キチンとした警護ですよね」
と言った。
「そう何度も、あのような事件に巻き込まれたらこちらがタマラン」
ＨＧとＨＹはフェリー埠頭での事件を思い出していた。
「さてと、誰に任せるかね」
と言うと、ＨＹは自分を指さして、
「今度もわたしに任せてください！」
と言った。ＨＧはＨＹの売り込みに一瞬折れかけたが、
「いや、お前さんＭＫ社長に年齢バレてるだろ」
と言うと、ＨＹは思いっきり膨れて
「そうしたのは、誰でしたっけ？」
と言って、ＨＧの足を思いっきり踏んづけた。
「イテ！何しやがる」

ＨＧは店内を見渡し、ＩＹを見つけて
「ＩＹ、おいで」
「はい、何ですか准尉」
「芸能事務所〇×エージェンシーのＭＫ社長から人気歌手ＩＭさんの警護依頼が来た。年

齢の近いお前に任せようと思うがどうか？」
「はぁ…」
「あっ、ＩＹいいわねー。芸能人とお知り合いになれるなんて…わたしの時は初任務が事件になっちゃったけど…」
とＨＹがＩＹを冷やかす。
「…実際、芸能人と言われても…私普段テレビの歌番組とか観ないので…」
「そうよね、ＩＹが居間のテレビ観ている時って、ニュースとかドキュメント番組くらいだものね」
とＴＹもＨＹ達の会話に入る。
「いいなぁ…ＩＹ、あたしが変わって欲しいくらい」
とＩＡも口を出す。それを聞いたＴＹはＩＡに向かって
「ＩＡ…あんた、まだ〝特別銃器携帯・使用許可証〟を持ってないでしょ！この前の試験落ちた癖に…警護任務には銃器携帯だからあんたには無理だよ」
「そんなー、姐さん」
「…私でいいのでしょうか？准尉」
と不安になってＨＧに訊ねるＩＹに対して
「今回は、警護対象のＩＭさんと年齢が近いと言う理由からだ。お前が芸能人に対して興味がない事も選んだ理由の一つだ。他に目を奪われずに任務を遂行できると俺は考えている」
とＨＧが言うと、ＩＹはＨＧの期待に応えようと、
「はい、任せてください」
と言った。
…この時、ＩＭ２６歳、ＩＹ２４歳。

●芸能事務所○×エージェンシー

ＨＧは翌朝ＩＹを連れて依頼を受けた芸能事務所○×エージェンシーを訪れた。

ＨＧとＩＹはビルの一階で受付を済ませると、迎えに来た社長秘書に案内されて最上階の社長室に通された。

社長室の手前に秘書の居るフロアがあり、社長秘書は机の上の内線電話の受話器を取ると、

「社長、碇屋のＨＧ社長と、もうお一方をお連れしました」

と言うと、「ああ…通してちょうだい」と返答があった。

「では、碇屋様こちらへ…」

と言って、社長秘書が社長室のドアを開けた。

「やぁ、碇屋さんわざわざのお運びありがとさん」

部屋の奥にある大きなデスクから、ＭＫ社長が出てきて、ＨＧ達を出迎えてくれた。

「この度は、当社碇屋のサービスを御利用いただきまして誠にありがとうございます」

ＨＧとＩＹが挨拶をした。

「あら…この前のＨＹちゃんだったっけ？…今度は違う娘連れて来たのねー」

「はい、この娘はＩＹと言って、ＩＭさんに一番年齢の近い彼女に任務に当たらせようと思って連れて来ました」

「初めまして、碇屋エージェントのＩＹと申します。よろしくお願いいたします」

と言って、ＨＧの後ろに居るＩＹが頭を下げた。

「そーなの、まぁ、そこに座ってね。もうじきＩＭとマネージャーが来るから」

と言って、ＭＫ社長はソファーを勧めた。

「「はい」」

社長秘書の出すコーヒーに「（市販の紙パックのドリップコーヒー…？こんなにいい身分

なのに?)」と思いながら、ＩＹはＨＧを見ると、ＨＧは平然としてコーヒーを飲んでいた。
「(准尉は、このコーヒーの味、どう思っているのかしら…我慢しているのかな?)」
社長室に鳴る内線電話にＭＫが出ると。
「あっ、入ってきていいわよ」
と言った。
社長室のドアが開くと、人気歌手ＩＭとマネージャーが入って来た。
「「社長、おはようございます!」」
と言って、ＩＭとマネージャーが挨拶をすると。
「おはよう…そこに掛けて」
と、ＨＧ達の正面のソファーを勧めた。ＩＭが座ると、ＭＫ社長はＨＧ達を紹介した。
「こちらは、Ｙ国際港のフェリーの事件でＩＭちゃんを救出した碇屋の社長さんのＨＧさんと、その部下のＩＹちゃんよ」
「ＨＧです」「ＩＹです」
「どうも、あの時は…ＩＭです」「同じく…この娘のマネージャーのＵＫです」
ＨＧ達が互いに挨拶をするのが終わると、ＭＫ社長は
「ＩＭちゃん…こうして改まって挨拶するのは初めてかしら?」
「いや…海浜アリーナのコンサートの後、白山亭に行ってお会いしました」
「そーなの?」
「…はい、助けていただいたお礼と白山亭のコーヒーを飲みに…」
とＩＭが歯切れの悪い返事をした。それを聞いてＨＧは「(…店内のステージでミニコンサートをやったのは、彼女の独断かな?…黙っているか)」と思い、ＩＭを見ると、ＩＭはＨＧに向かって少し手を挙げながら片目を瞑っていた。ＩＹはＩＭの考えが読めずに、
「あー、店内のステージでーー」

と言いかけ出したので、ＨＧはＩＹの膝を叩き、
「そうそう、ご挨拶してくださいまして…丁度ご協力いただいた警察の人達がいたので…」
と続け、ＩＹに「(黙ってろ！)」と小声で言った。
「ＩＭちゃんは、こちらのＩＹちゃんとは？」
「確かフェリーの中で、あたし達を保護してくれたリーダーの方ですよね？」
ＩＭはフェリーのバーラウンジで自分に『警察です。助けに来ました。騒がないで指示にしたがってください』と書かれた紙を見せていたＩＹを思い出していた。
「はい」
ＩＹは嬉しそうに返事をした。

●ストーカー被害
ＨＧは改めて、
「で、ご依頼と言うのは？」
と聞くと、ＭＫ社長は気を取り直して、深刻そうに話し始めた。
「そうそう…そうだったわね。碇屋さんを呼んだのは、実はＩＭちゃんの住んで居るマンションの部屋がまたバレちゃって、ストーカー被害に遭っちゃって」
「ストーカー被害ですか？」
ＨＧが訊ねると、
「そーなのよ。しつこいったらありゃしない」
と言って、ＭＫ社長は両手を挙げて俯いて首を振った。
「先程『また…』と言いましたが、そんなに？」
ＨＧが驚くと、
「そーよ、ＩＭちゃんが引っ越しをしても必ず居所を突き止めて…それから…」

とＭＫ社長が言って、ＵＫに促すと、ＵＫはスマートフォンを取り出し操作して、

『お前の居所は、どこに行ってもすぐ判るぞ！』

と玄関ドアにスプレーか何かで書かれた写真をＨＧ達に見せた。それを見たＨＧ達は驚いて、

「…これは、酷いですね…それで、引っ越しを何度もですか？」

とＨＧが訊ねると、ＵＫが

「はい、今年に入ってもう３回程…」

「「そんなに？」」

ＨＧとＩＹは驚いた。その頻度はあまりに酷い。ＨＧはＩＭに向かって

「心当たりは？」

「うーん、その手のファンは多いですけど、こんなに悪質なのは…」

とＩＭは口を濁した。それを見てＭＫ社長は、

「こんなんで、ＩＭちゃん仕事に身が入らなくなって…それでＨＧ社長にＩＭの警護をお願いして、出来ればストーカー犯を捕まえて欲しくて」

「そうですか…これ以外に襲われたとかはないですか？」

「そーねぇ…ある時は、マンションの玄関先でボヤ騒ぎ起こされたことがあったわねー」

とＭＫ社長は記憶を辿りながら言った。

「そのボヤ騒ぎは、何時頃ですか？」

ＨＧが訊ねると、ＩＭが

「一昨年です。幸いツアー中で長期に留守にしていた時です。これを機会に数度の引っ越しが始まって、その度に玄関ドアに落書きや、ある時には、動物の死骸とか置かれたこともあ

りましたね」
「警察には？」
「はい、相談しました。被害届も出しています」
とＵＫが答えた。
「で？」
「警察は巡回の頻度を多くしてくれましたが、マンションの周辺に犯人らしき人物は見かけなかったと言っています。また警察はマンション内の住人だとすると、警察は立ち入ることが出来ないので、管理会社に相談するか、引っ越すことを勧められました。その内、巡回の回数が減ると、また玄関先で…」
「マンションの監視カメラとかは？」
「マンションの管理会社によると、不審な人物は写っていないとの事でした」
ＨＧは口に手を当てて、深刻そうに
「…そうですか、それはさぞかし心配でしょう（マンション内の監視カメラに写らない？何故だ？）」
「はい…」
とＩＭが神妙に返事をした。ＨＧは一旦手を額に当ててから、ＭＫ社長の方に向き直り、
「判りました。ＩＹをＩＭさんのマンションに泊まり込みで警護する事でどうでしょうか？」
とＨＧが提案すると、
「それでいいわよ。ＩＹちゃんはあたしの会社の派遣スタッフとして社員証を渡すわね」
とＭＫ社長は承諾した。ＨＧは
「ありがとうございます…あと、それから、ＩＭさんの今まで住んでいたマンションの場所を教えて貰えますか？」

と聞くと、
「いいでしょ。マネージャーから聞いてね」
とＵＫに振ったので、ＵＫは頷くと、
「判りました。早速リストを作ります」
と返答した。

●警護任務

その日の晩から、ＩＹはＩＭのマンションの部屋に泊まり込む事になった。近頃ではＩＭ一人では心配なので、マネージャーのＵＫも一緒に泊まり込んでいるそうだ。
「散らかってるけど、気にしないでね…」
と、玄関口でＩＭが苦笑いして言う。
「お邪魔します」
とＩＹは部屋を見渡すと、廊下にはまだ開けられていない引っ越し業者の段ボール箱が山積みになっていた。
「度重なる引っ越しで、まだ開けていない箱が多くて…これでも荷物をかなり減らしたんだけどね」
とＩＭが言うと、それを受けて
「下手に不用品をゴミとかで処分しようとすると、ごみ置き場が荒らされたことがあって…」
とＵＫが続けた。
流石に人気歌手だけである。高級マンションに３ＬＤＫの部屋。マネージャーが泊まり込んでいると言う事だが、一人でこの部屋を借りられるのは、成人後ワンルームのアパートに居て、今も畳８畳間にＨＹと一緒に居るＩＹにとっては、羨ましい限りであった。

「うーん、本当は来客用に一部屋開けてるんだけど、今、荷物置き場で塞がっていてね…」
と、ＩＭが苦笑いすると。
「警護任務は２４時間なので、なるべくＩＭさんの傍にいた方がいいと社長が言っていました」
と真顔でＩＹが言った。それを聞いてＩＭとＵＫは驚き、
「「あなた警護任務は初めてなの？」」
と聞くと、
「はい…そうです。社長がエージェント派遣部門の仕事を始めて受けた仕事も、あのフェリー埠頭の事件が初めてでしたので…」
とＩＹが申し訳なさそうに答えた。
「そっか、あたしも警護受けるのは、初めてなんだ…お互い様ね」
とＩＭが笑ったので、ＩＹも連れて笑った。
「私も始めてよ…よろしくね」
とＵＫも言った。

「…そうすると、今晩からは…ＩＹさんはどこに寝たらいいのかしら…」
と言って、ＵＫが部屋を見回す。
「じゃ、あたしの寝室にＵＫと一緒に３人で寝る？」
とＩＭが言うと、ＩＹは遠慮して
「いや…それは…、それに私はお客じゃないので、このリビングのソファーで十分です」
とソファーを指した。
「それは、悪いわよ…」

とＩＭが申し訳なさそうに言うと、ＩＹは首を横に振って、
「仕事ですから、気にしないでください」
「そーなの、あんたがそう言うのなら、それでもいいけど…」
と行ったところで、ＩＭのお腹が鳴った。ＩＭは照れ笑いをしてキッチンに行くと、
「あー、お腹空いた…今何か作るね」
と言って、冷蔵庫を開けて食材を取り出しているＩＭとＵＫを見て、
「普段は、食事はどうしているのですか？」
と興味本位でＩＹが訊ねた。ＩＹは、ＩＭは人気歌手だから、外食が多いと思っていた…それも、他のアイドルとかスターと一緒の会食とかを勝手に想像していた。
「そうね、普段家に居る時は一人で料理してるわね。ＵＫが泊まりに来た時は一緒に作るけど…ツアーとかの地方興行は、ホテルの食事とか、外食しているけどね」
「同業者の方々とは？外で会食とかは？」
「あたし達歌手は稀にね…みんな忙しいから、スケジュールがなかなか合わないし…男性芸能人の人達は、毎晩のように飲み歩いている人もいるけどね」
と言って、ＩＭは肩をすくめた。それを聞いてＩＹは
「芸能界って、もっと社交的なモノだと思っていましたが…」
と言うと、ＩＭはＩＹの疑問はもっともだと思い。
「まぁ、あんたが考えてるほどじゃないわよ…テレビでは仲良くしているけど、裏ではいがみ合ってたりするわね」
とＩＭが言うと、ＵＫも頷く。ＩＹは驚いて、
「そうなんですか？私テレビで普段から歌番組とか観ないので、芸能人についてもあまり知らないもので…ゴメンナサイ」
と言うと、ＩＹの言葉にＩＭとＵＫは逆に驚いて、ＩＭが

「あら、あんたテレビ視ないの？」
と訊ねた。ＩＹは申し訳なさそうに、
「はぁ…、ニュースとかドキュメント番組くらいしか…」
と言うと、ＩＭは呆れて
「オッサンみたいだね…じゃネットとかは？動画サイトくらい観るでしょう？」
「いえ…ネットもあまり」
「珍しいわね（…この娘。リア充じゃないわね）」
「スミマセン」
「いいわよ、別に…あんたって、仕事の鬼みたいな雰囲気あるし」
「…ハァ」
ＩＭの嫌味もＩＹには理解できなかった。

ＩＹと会話しながらも、料理の手を止めることなく続けているＩＭにＩＹは感心した。
「普段から料理をするのですね。包丁の使い方が堂に入っていますね」
「アハハ…ありがとうね」
食材を切りながら、ＩＭは話を続けた。
「あたしは、母子家庭でね…母親が遅くまで仕事しているから、子供の頃から自分で食事を作ってたんだ。あんたは？」
「私は、実は…最近まで料理をした事がなくて…」
とＩＹが申し訳なさそうに言うと、ＩＭは呆れて
「余程、いい家庭環境だったんだね」
と嫌味を言った。それを聞いてＩＹはＩＭの嫌味が理解できずに、真顔で
「いえ…毎日が針の筵でした」

と答えた。

『『針の筵』って…」

「私も幼い頃は、母子家庭でした」

ＩＹの話にＩＭが自分と同じ母子家庭と知り、ＩＹの発言から

「お母さんに虐待でもされてたの？」

と訊ねると、ＩＹは首を横に振って、

「いいえ、優しい母でした…その母から『お前の父親は亡くなった』と言われていたのですが、私が小学生になる前に、母が癌に侵され余命いくばくもなくなった時に、亡くなったはずの父親と言う人が現れ、私を引き取りました」

「…ナニ？それ」

ＩＹの話にＩＭは驚くと、ＩＹはそのまま

「父親は、Ｂ侯爵と言って、母はＢ侯爵家に居た使用人だそうです」

「はぁ？ナニその物語みたいな話」「…侯爵って、あなたの父親は貴族なの？」

ＩＹの話にＩＭとＵＫは料理の手が一旦止まり、目が点になった。

「父上に引き取られた先には、皇王家から降嫁した義母上と異母弟の嫡男が居まして、義母上が家の中で高慢になっていて、私を何かにつけて『所詮庶子』と言ってさげすんでいました」

「継母ね…ホントに物語みたい」

とＩＭはしみじみと言うと、ＵＫが

「〝父上〟〝義母上〟なんて、お嬢様の言葉遣いね…」

と言うと、ＩＹは頭を振って「やめてください」と言って、話を続けた。

「私は成人するまで、Ｂ侯爵家に居て教育を受けていました。家は、弟が継ぐので私は家を出され、母の姓である〝Ｉ〟を再び名乗り独りで生きることになり、民兵会社に入社しまし

た。そこで出会った教官…今の社長ですが、定年退職後に喫茶店とエージェント会社を興したので、会社を辞めてもっと教えを乞おうと教官に弟子入りしました（すみません…最後の方は順番を逆にしてますが、ＩＹの方便です。作者注）」

「ナニ？その複雑な人生…『毎日が針の筵』と言うのもあんたの話から分からないわけではないけど…」

とＩＭはため息をついた。

「…なので、成人するまで料理をしたことが無く、一人住まいの時でも弁当とか外食ばかりでした。今の会社に入社してから社長の家に住まわせて頂いて、そこで他の社員の方達から料理を教わっています」

とＩＹが話し終えると、ＩＭは

「ふーん、あんた社長の家に住んで居るんだ。あたしら芸能人なんかも、社長や師匠の家に住んでいる人も多いけど…」

とＩＭが言うと、

「はい、私は社長に弟子入りしましたので、師匠である社長の家に住んでいます。それで普段は社長の経営する喫茶店の女給…ウェイトレスをしています」

「はーん、成程ね。あの姿（女給姿）は、借りた衣装ではなくて、普段の仕事着なんだ…確かに事件後に（白山亭）店内でミニコンサートやった時も、あの恰好してたわね」

ＩＭはフェリーの中で自分を保護してくれた女給姿のＩＹの姿が、他の女性警官達と違って、その立ち振る舞いが自然であった事を思い出した。（「巻き込まれ親父の突入」参照）

「そうです」

とＩＹが答えた。

「あなたのあの格好…可愛かったわよ…」

とＵＫが言うと、ＩＹは恥ずかしそうに「ありがとうございます」と言った。

ＩＭはＩＹの今の暮らしの事に興味を持ち始め、

「あたしは、貴族って良くわかないけどさ、貴族の暮らしと今のあんたの暮らしって、どっちがいいと思ってる？」

「はい、それは今の暮らしです」

とＩＹは即答した。ＩＹの返事にＩＭは、「（あたしは、貴族の暮らしの方が絶対いいと思うけど…）」と、考え「なぜ？」と訊ねた。

「はい、今は私が敬愛する社長と先輩方に囲まれて、色々忙しいですが毎日が充実しています」

と嬉しそうに話すＩＹを見たＩＭは納得して

「そーなんだ」

「社長は、私に生きる事の大切さと、生きる術を教えてくれています。実家では勉強や社交マナーは学びましたが、実生活に役立つ事は、今の暮らしで教えて貰っています」

「じゃ、ＨＧ社長はあんたにとって父親みたいな存在なんだ」

とＩＭに言われて、ＩＹはハッとした。

「…そうですね。私にとっては第二の父親ですね…民兵会社に居た頃の同期達とか、ＨＹ先輩は時々〝親父〟と呼んでいますし」

「あたしには、嬉しそうに話すあんたを見ると、ＨＧ社長は〝親父〟どころでなく〝恋人〟に聞こえるけどね」

と嫌味半分で言うＩＭに

「そうかも、しれませんね」

と否定せずに即答したＩＹに呆れた。

遅い夕食を終え、３人で後片付けをしてから、ＩＭは冷蔵庫からビールを持ってきて、
「あんた、お酒は？」
「嗜む程度には…」
「ふーん、流石はお嬢様」
「やめてください」
ＩＹが〝お嬢様〟呼ばわりされるのを嫌がる癖に、世間の事を良く知らないような感じがして、
「…そう言えば、あんた事務所であたしがあんたの店に行った時の事を話した時に、ＨＧ社長はあたしが店のステージでミニコンサートをしたのを黙ってくれたけど、あんたはそれを話そうとしてＨＧ社長に止められたでしょ」
「はい」
「あの時、ＨＧ社長が機転を利かせてくれなかったら、あたしがウチの社長に叱られるとこだったんだよ」
「はぁ」
怪訝そうに返事をするＩＹに、ＩＭは「（やっぱり、この娘は、まだ世間知らずなんだな…）」と思い、
「…分かって無いわね。もしあの時あたしがあんたの店内でミニコンサートをしたと知られたら、ウチの社長の事だから『コンサート料金徴収したか？』と言われるとこだったのよ！」
「えっ？」
と驚くＩＹに
「あのミニコンサートは、あたしとツアースタッフからのお礼の意味でタダでやったのよ

…会社に内緒でね…やっぱり、分からなかったのね。あたしが歌を歌うと言う事は、それでお金を稼いでいるから…逆にあたしが歌うと、お金が貰えるの。あのミニコンサートだって、ＨＧ社長はあたし達が引き上げる時に『少ないですが…』と言って〝足代〟として、あたしのギャラの正規料金を渡してくれたのよ…これがオトナの事情。あんた、一見まともそうに見えるけど、意外に世間知らずの様だから…これから世俗に紛れて生きていくには、これくらい解る様になりなさいね」

「…はい」

と言って、ＩＹは項垂れた。

「あんた。会社の人以外に友達って言う人居ないでしょ」

とＩＭの更なる追い打ちに、ＩＹは

「…ハイ」

と言って、一層項垂れた。それを見てＩＭは「(ちょっと、言い過ぎたか…)」と考え、ＩＹが可哀想になり

「だったら、あたしがあんたの友達になって、世俗の事を教えてあげる…って恰好つけても、あたしもあんたと同じで子供の頃から歌手で芸能活動してるから、ある意味あんたと同じく世間知らずの範疇に入ると思うけど、あんたより俗世間を知っていると思うよ」

と苦笑いするＩＭにＩＹは

「はい、ありがとうございます」

と言って、頭を下げた。

ＵＫが入浴中にＩＭとＩＹがお酒を飲みながら話していると、ＩＹの左耳に付けている補聴器が変な音を出して、思わず外して目で見ていると、

「ＩＹ、それナニ？」

「はい、補聴器です。私は生まれつき左耳が難聴でして…」
「そうなんだ」
「そのため、学校の授業では外国語の聞き取りとか、音楽が苦手で…」
「大変だね。聴力はあたし達ミュージシャンにとっては生命線だからね…以前、ステージで歌う前にライバル歌手にわざと耳元でクラッカー鳴らされて、暫く耳が聞こえなくなって、歌がうまく歌えなかった事があって苦労したから、あんたの気持ちは少しは解るかな？」
「そんなことがあったんですね」
「…で、どう？壊れたの？」
と心配してＩＹの手に持った補聴器を覗き込むＩＭに、ＩＹは片目で補聴器を見回して、
「…いえ、見た目じゃ分かりませんね。作った所に持って行って見て貰わないと…これ特注なので」
「特注！流石、お嬢様」
とＩＭが皮肉っぽく言うと、ＩＹは真っ向から否定して、
「違います。これは社長が私の為に知り合いの電気部品店に頼んで作って貰ったものです」
「え？実家に居た頃に作った物じゃないの？」
「はい、実家に居た時は作って貰えませんでした」
「どうして？」
「実家では、左耳の難聴については父上を始め、義母上や使用人まで知っていましたけど、誰も私に補聴器をさせようとした人は居ませんでした」
「それじゃ、聞きずらかったでしょ？」
「はい、私が聞こえないときは私が左耳に…こうやって（と言って、ＩＹは左耳に手を当て）、声の主の方に向けば、聞こえる様に話してくれました」
「あんたのその左耳の難聴について、ＨＧ社長は知っていたんだ」

「はい、私が民兵会社に居た頃に当時教官の社長が、私の何気ない仕草に左耳の難聴に気づかれて、二人きりの時に私に訊ねてくれました」

「…そう言えば、さっきも民兵会社に居たと言ってたけど、その耳で民兵会社に入ったの？あんた。よく入社できたね」

「ええ…、入社時の身体検査は自己申告ですし、検査項目には聴覚検査はありませんでしたから…もっとも、入社後の身体検査でバレましたが、民兵会社の社長は雇ってくれました」

「ふーん、それじゃエージェントの任務に差し支えるから、ＨＧ社長はあんたに補聴器を作ってくれたんだ」

「はい」

とＩＹが嬉しそうに返事したので

「大切にされてるね…お姫様！」

ＩＭの皮肉を込めた『お姫様』にＩＹは酔った顔を一層赤くして、

「や、やめてください」

「アハハ。でも補聴器をわざわざ作ってくれるなんて、ＨＧ社長はあんたの腕前を相当買ってくれてるんだね」

「…そうでしょうか…」

と言って、ＩＹはＦ県領地の事件の時にＨＧに自ら弟子入りを言い出したことを思い出していた。

「（私は、『死にたい』と思っていたのを、『生きることが大事』と教えてくれたのは、准尉…私は准尉から色々教えていただき、准尉のお役に立ちたい…）」

その晩、ＩＹは度々左耳に付けている補聴器が変な音を出して続けたので、補聴器を外し充電器に入れていた。

翌朝、充電器から補聴器を取り出して左耳に付けると、昨晩の変な音は聞こえなかった。
「何だったのだろう…電池が切れかけていたのかな？…スケジュール表に今日は帝都にある電気部品街でのイベントが入っているから、ＩＭさんに許可貰ってからイベントを見計らって作って貰ったお店に行ってみよう」
とＩＹは独り言を言った。

●帝都電気部品街

この日のＩＭは帝都にある電気部品街でのイベントに出る予定になっていたので、イベント会場の控室に居るＩＭに「ちょっと席を外します」と断り、ＩＹは電子機器の部品店を訪れた。そこは、以前ＨＧに連れられてＩＹの補聴器を作ったＨＧの古い知り合いの経営する店であった。
「いらっしゃい…おやＩＹ。久しぶりだね」
「はい、ご無沙汰してます」
「補聴器が調子悪くなったのかい？」
「はい、変な音がするんです…」
「どれ、見せてごらん」
ＩＹが左耳にしている補聴器を店主に渡すと、店主は補聴器を耳に当ててみたが、
「今はしてないね」
「はい、昨晩の事です。寝る時に外して充電器につけて、朝付けたら変な音がしませんでした」
店主は補聴器を分解して中を見た。
「…別に、部品が汚れているわけではなさそうだ」
と言って、店主はダストクリーナーをかけると、治具に補聴器をセットして測定器を当てた。

「…別におかしな所はないようだね。もう少し調べてみるから、こっちの予備持って行って」
「はい、ありがとうございます」
「この事、ＨＧには話をしたの？」
「あっ…」
「忘れていたようだね。こっちからも連絡はするけど、ＩＹもＨＧに連絡してくれ」
「はい、分かりました」

ＩＹは店を出ると、直ぐにＨＧに連絡した。
『はい、ＨＧ』
「あっ、准尉。ＩＹです」
『ＩＹか？どうした？』
「はい、実は昨晩、補聴器の調子がおかしくて」
『ナニ？』
「なにか変な音がして…」
『音？どんな』
「はい、〝キーン〟というか…うーん。あっ、マイクがハウリングした時の音みたいな」
『その音は、ずっと鳴り続けているか？』
「いえ…時々…私とＩＭさんが会話している時とか…」
「ン？…今はその音は聞こえているか？」
「聞こえません」
『今、どこに居る？』
「はい、帝都にある電気部品街にある准尉が私の補聴器を作ってくれた店の前です」
『なんだと？ＩＭさんはそこに居るのか？』

「いいえ…ＩＭさんは、電気部品街のイベント会場に居ます」
『すぐ戻れ！そんなんじゃ警護になっていないぞ』
「しかし…補聴器から変な音が…」
『何のために、俺達が居るんだ。お前さんのバックアップするためだぞ』
「…スミマセン。直ぐにＩＭさんの警護任務に戻ります」
『俺もそっちにいく。イベントが終わったら、直ぐに連絡しろ』
「はい」
と言って、ＩＹは通話を切ると「(准尉に叱られた…早く戻らないと！)」と思って、その場を走り出した。
ＩＭはイベント中であったが、幸い会場の警備員に守られていた。
「スミマセン。ＩＭさんの警護任務で派遣されている者です。通してください」
と言って、ＩＹは首にかけているスタッフ証を見せて関係者入り口から入り、中の人をかき分けるようにＩＭに近づいた。

●めんどくせーー
白山亭…
バーカウンターでサイフォンを操作してコーヒーを淹れているＴＴの所にＨＧが顔を出し、
「ＴＴ」
「はい」
「任務で出ているＩＹから、補聴器の具合がおかしいとの報告を受けたので、ちょっと行って来る」
「まぁ、それは大変ですね。あの娘は左耳が不自由ですから、聞こえないのは任務に差し支

えますね」
「聞こえない事は確かに任務に差し支えるが、ＩＹからの報告にちょっと気にかかる現象があって…」
「何がですか？」
「ＩＹの補聴器は特注品で、スマートフォンとの組み合わせで通信ができるように作ってある」
とＨＧが言うと、ＴＴも思い出した様に
「そうでしたね」
と答えた。
「補聴器とスマートフォンとの間の通信は、無線プロトコル通信じゃなくて、それ以前技術でのラジオ周波数帯を使用しているんだ」
「えっ、そうなんですか？」
と驚くＴＴの横からＨＹが顔を出して、会話に入り込む
「無線プロトコル通信を使用するＩＣチップセットを使うと、役所に電波取締法に基づき使用する周波数とかＩＣチップセットの物理アドレスとか届出をしないといけないので、それが要らないラジオ周波数帯を使って居るんだ」
「意外とセコい作りですね」
と大学で通信工学を専攻していたＨＹがＨＧを睨む
「うるせー、ＨＹ。通信プロトコル使ったら、ＩＣチップセットに組み込むソフトウェア開発が必要になるじゃないか…」
「そうですが、そんなセコい事してるから、おかしくなるのでは？」
「それじゃないと俺は考えている」
「「？？」」

ＴＴとＨＹは共に首を傾げた。
「ＩＭさんの部屋に電波を発信する…例えば盗聴器とか…」
「「盗聴器？」」
「うん、盗聴器なんかは、未だにラジオ周波数帯を使っているモノが多いぞ。それも強力な違法電波を遠くに飛ばすほどの出力を持つのが…」
「ＩＭさんの部屋に盗聴器があって、それが出す電波をＩＹの補聴器が拾ったということですか？」
とＨＹが言うと、ＨＧは頷き、
「…多分ね」
「何のためにですか？准尉」
「オイオイ、それを俺にきくかぁ？仕掛けているのが、ライバルの芸能事務所かマスコミとか…はたまたストーカー犯か…とにかく可能性があるから、これからＩＹ達と合流して調べてくる…めんどくせーー」
「「はい、お気をつけて（…そう言って、現場に首突っ込んで解決するんだから！）」」

●ＨＧ登場

ＩＭの参加するイベントが終わる頃になって、ＨＧが会場に姿を見せた。
関係者出入り口でＩＭの前に出てくるＩＹを出迎えると、ＨＧはＩＹを手招きした。ＩＹがＨＧの所に行くと、ＨＧは、
「補聴器の具合は？」
と、まずは聞いてきた。
「はい、今の所大丈夫です」
「そうか…この後の予定は？」

とＨＧはＩＭのマネージャーＵＫに訊ねると、ＵＫはスマートフォンを操作して、
「この後は、帝都のスタジオで新曲とダンスのレッスンの予定になっています」
「場所はどこです？」
「帝都内の…ここです」
と言って、ＵＫがスマートフォンの地図アプリを見せる。
「移動は、電車かタクシーですか？」
「はい」
「それでは、私の車で送っていきましょう…道々聞きたい事もあるので」
「「いいんですか？」」
とＩＭとＵＫが言うと、
「はい、部下が貴女を危険に晒したお詫びです」
ＨＧがシレっと言うと、それを訝しがるようにＩＭは
「…『危険に晒したお詫び』って、何ですか？」
と訊ねる。ＨＧは憮然として
「はい、部下のＩＹが一時的ですが、ＩＭさんの元を離れたので…」
「…それだけ？」
「はい、任務は〝２４時間警護〟です。一瞬でも目を離してはいけません」
ＨＧの言葉を受けてＩＭが
「でも、補聴器がおかしいと言うので、今日のイベントの最中に作った店にいく事をあたしが許可しました」
と言うと、
「それは、理由になりません。補聴器がおかしくなったのなら、あらかじめ予備を用意するか、手前どもの誰かを呼ぶなりすれば済む事です」

ＨＧの話を聞いて、ＩＹは「(准尉は、ＩＭさんに話をしているフリをして、私を叱っているのだ…)」と思った。他の人なら、ＨＧの話はＩＹに対する当てつけに聞こえ、反発を覚えるが、ＨＧとＩＹの師弟関係がＩＹを反省する思考に向けた。

ＨＧは、ＩＹ達を自分の車に乗せると、ＵＫが指定したスタジオに向かった。その車内で

「ＩＹ、昨晩どこに居た？」

「あっ、ハイ。昨晩はＩＭさんの部屋に居ました」

「ＩＭさんの部屋の中で補聴器に異音が聞こえたんだな」

「？はい…」

「場所と時間を詳細に報告しろ」

「はい、補聴器の異音はＩＭさんのマンションのリビングに居た時です」

「それは、常時だったか？」

「いいえ、異音に気づいたのは、ＩＭさんの部屋で夕食後に話をしていた時です」

「時間は？解るか」

「はい、２１時を回った頃からです」

「再度聞くが、今は異音がなってないんだな？」

「はい…」

と答えて、ＩＹは思い出した様に、

「実は、電気街の部品店…私の補聴器を作ってくれたお店で、予備と交換して貰いました」

ＩＹの話にＨＧは

「何だと？」

と言って驚いた。

「すみません」

謝るＩＹにＨＧは思案顔になるが、
「それじゃ、切り分けは…いや、出来るか」
「？？」
ＨＧはＩＹが補聴器を交換した事を知り、現象の切り分けを諦めかけたが、逆にＩＹの補聴器の故障でない事を実証できると考えた。
「マネージャーさん、ＩＭさんのレッスンの後の予定は？」
「はい、その後は帰宅になっています」
と言いながら、ＵＫは自分のスマートフォンを操作していた。それをフェンダーミラー越しに見たＨＧは
「ちょっと質問宜しいですか？」
「はい、なんですか？」
「ＩＭさん達事務所のタレント達のスケジュールはサーバーで管理されているのですか？」
「はい、そうですが何か？」
「スケジュール表を見ることが出来る人は、どんな人ですか？」
「はい、私達マネージャーと所属タレントはもちろんですが、事務所の人なら誰でも見ることができますよ」
「事務所の人なら誰でもですか？」
「勿論、スケジュール表にアクセスするには、社員ＩＤとパスワードが必要になります。ハッキングの疑いでも？」
「いや、念のためですが…内容は、業務のスケジュールだけですか？プライベートの事は入れてませんね？」
「はい、オフのスケジュールとかは入れていません…稀に他のアイドルグループとかが、遊びのスケジュール入れてたりしますけど」

「ありがとうございます。そのスケジュール表にＩＭさんの引っ越しの件について入力した事は？」
「いえ…でも、どうして？」
「私のまだ仮説の話ですが、ＩＭさんの引っ越しの情報源についてですが…そのスケジュール表に対するハッキングもしくは、盗み見…または盗聴の可能性があります。今マネージャーさんの話からだとスケジュール表に対するハッキング等の可能性は無くなりましたから、あとは、ＩＭさんの部屋に盗聴器が仕掛けられている可能性が在ります」
「盗聴ですか！」
ＩＭがＨＧの話に驚く。
「ＩＭさんとマネージャーさんにお伺いします。引っ越しについて、場所や日時についてなどＩＭさんの部屋で話をしていませんか？」
「「あります」」
とＩＭとＵＫが同時に答えた。
「…そうですか。ご協力ありがとうございます」
とＨＧは確信した様にニヤリとした。
「なぜ、あたしの部屋に盗聴器があると思ったんですか？」
「ＩＹですよ…彼女の補聴器は補聴器単体ではなく、通信機能を持っています。ＩＹ」
「はい」
「お前さん、普段任務が無い時…２１時頃は何してる？」
「…シフトによりますが、白山亭のＰｕｂ営業で女給をしています」
「その時、補聴器は？」
「はい、いつ准尉に呼び出されても応じられるように、通信機能を入れています」
「じゃ、同じ時間帯に母屋に居る時、補聴器はどこにある？」

「はい…充電器に入れて充電しています…お風呂とか入りますので」
「だよな」
「アッ！」
と言って、ＩＹは思わず左耳に付けている補聴器を手で覆った。それを見たＩＭが
「ＨＧ社長、どういうことですか？」
「はい、彼女は普段私の店で女給をしていて、特に２１時～閉店まで女給のシフトに入っている事が多いです。私がバーカウンターに居てＰｕｂ営業で賑やかになっている店内で難聴の彼女を呼び出すときや彼女からのオーダーを聞くのに、その補聴器を使用しています。それをＩＭさんの警護任務中もオフにするのを忘れていたので、多分ＩＭさんの部屋にある盗聴器の発する電波を補聴器が拾ったものと思われます」

ＩＭがレッスンを行うスタジオについて、レッスンを始めた。その間ＨＧはＩＹとＵＫに対して、ストーカー犯を捕まえる作戦を説明する。
「まず、ＩＭさんの部屋にある盗聴器を探します」
ＵＫとＩＹが頷くと、
「次に、ストーカー犯に対して引っ越しの話をします…無論これは作り話ですが。引っ越し先は取り敢えず、私の店…白山亭の３階にしましょう…次のマンションが決まるまでの仮住まいと言う事で。日付は明後日。引っ越し業者は〝Ｉ運送会社〟としましょう」
「〝Ｉ運送会社〟って…確かＩＡの実家ですよね」
とＩＹが言うと、ＨＧはニヤリとして
「そうだよ。ＩＡに協力してもらう。こんなこともあろうかと、ＩＭさんの次の引っ越しをお願いすべくＩＡに実家に話をつけて貰っている」
「そこまで！」

とＩＹが驚くと、

「…もっとも、今回はフリだけだから、ＩＭさんの部屋にある梱包を解いていない段ボール箱と家具の数点…それから〝Ｉ運送会社〟が持ち込んだ空の段ボール箱をトラックに乗せるだけだけど」

ＩＭのレッスンが終わり、ＨＧはＩＭ達を車でマンションに送り、その道すがらＩＭに作戦を説明した。

ＩＭの部屋にＨＧも上がり、『今日のレッスンの話とかしていてください』と書いたメモを見せて、ＨＧはＩＹの補聴器の通信機能をオンにして盗聴器を探し始めた。

盗聴器はリビングのコンセントのタップから電波が出ているのを確認した。

ＨＧは『見つけました。引っ越しの話をしてください』と書いたメモを見せた。それを見てＩＭとマネージャーはＨＧの車の社内で聞いた話を始めた。

「そう言えば、今日事務所で社長（芸能事務所のＭＫ社長）から、Ｂ県領地Ｙ市のＹ国際港駅前の〝白山亭〟に引っ越せと…」

「またーぁ？急に」

「だって、ここはもうストーカーに知られてしまったし…またドアに変な落書きされるの嫌でしょ！あの落書き消すのに結構なお金がかかるから…」

「うーん…でもそこってマンションなの？」

「社長の話だと違うそうよ。〝白山亭〟って喫茶店の３階に部屋があってそこに一時的に引っ越すんだって…仮住まいね。マンションについては社長が探しているそうよ」

「仮住まいね…喫茶店の３階なんてまたセキュリティの甘い所に…でもコーヒーの出前頼めそうね」

「引っ越し業者は、Ｙ市の〝Ｉ運送会社〟を使うって。荷造りから全てやって貰えるそうよ」
「あのケチ社長にしては、奮発してくれるわね」
「急な事だからじゃないの」
「そっか」
「引っ越しは、明後日。引っ越し業者は１０時にマンションの裏口に来るように社長が手配してるって」
「はぁーい」
「ＩＹさんも、今の引っ越しの話、聞いたわね。手伝って貰いますよ」
「はい、分かりました」
と言って、ＩＭとＵＫ、ＩＹは、ＨＧの顔を見る。ＨＧはニッコリして『はい、ありがとうございます』と書いたメモを見せる。

ＨＧはＩＹとＩＭ達を連れて部屋から廊下に出ると、
「盗聴器の場所は分かりました。でも取り除いたりすると不審に思われるので、そのまま普段通りに会話をしてください」
「あのー、プライベートな話はどうすれば？」
とＵＫが心配顔で訊ねると、ＨＧは
「差し支えない事なら、なるべく部屋でしてください。それ以外は部屋の外に居る時に」
「そうですか」
「明後日までの我慢です」
「「はい」」
とＩＭとＵＫが頷くと、ＨＧはＩＹの方に向いて、
「ＩＹ」

「はい」
「補聴器返すぞ、予備の補聴器でも同じ現象が起きたんだ。故障じゃないね。あとスマートフォンとの通信機能切っといて…あの部屋では、盗聴器の電波拾うから」
「はい」

●外堀を埋める
白山亭…
「帝都電気保安協会です。電気の点検に来ました」
と作業着の男が白山亭内にふらりと入って来た。それを、女給姿のＨＹが押しとどめる。
「電気の点検なら、勝手口から来てください。…それにあなたいつもの保安協会の人とは違うわね」
「…スミマセン、アルバイトなもので…」
「なら、電気工事士免許と保安協会の証明書見せてくれます？」
とＨＹが提示を求めたら、男は「忘れました」と言って、そそくさと逃げて行った。ＨＹはバーカウンターに行き、そこに居たＴＴに
「ＴＴ、今の人…」
「そうね、准尉が言っていたＩＭさんのストーカー加害者の可能性があるわね」
「写真は？」
「それは…もうバッチリ！」
「じゃ、准尉達と画像共有しましょ」
「そうね」
Ｉ運送会社…

「すみません、引っ越しのアルバイトの仕事ありませんか？」
と一人の男がふらりと事務所に現れて言った。
「あー、今は手が足りてますねー（ホントに来たわね…ＴＴさんの画像の人と同一人物）」
と帳簿を見ながらＩＡが答えた。Ｉ運送会社はＩＡの実家である。
「…そうですか」
と言って男はすごすごと帰っていた。ＩＡはその後を尾行した。

ＩＭのスケジュール先…
「あら…ヤダ…この人！」
ＴＴから画像共有された人物の写真をＩＹがＩＭとＵＫに見せて、ＵＫが驚く。
「知っている人ですか？」
「いえ、過去の引っ越し業者の人に似たような人が居たのと、別の引っ越し当日の電気の開通作業に来た保安員にも似た人を見た事があるような…」
とＵＫが言った。
「引っ越しにはＩＭさんは？立ち合いとかしますか」
「いいえ、彼女が留守の時に私が全部済ますので」
とＵＫは答えた。

白山亭母屋…
ＩＹ達からの報告を聞いたＨＧ。
「しめしめ…奴さん罠にかかりつつあるな」
とほくそ笑んでいると、
「ＩＡ帰りました」

「おう、お帰り。で、どうだった？」
「はい、実家に協力してもらい、事務所で張り込んでいたら、アルバイト志望の男性が現れました。ＴＴさんが画像共有した人物と同一人物です」
「そうか」
「はい、で、その後を尾行しました」
「えっ？」
ＩＡの報告にＨＧは驚いた。ＩＡはそのまま報告を続けた。
「その人物は帝都の〝帝城不動産南Ｃレジデンス〟と言う高級マンションに入っていきました」
と言って、ＩＡはスマートフォンの地図アプリで〝帝城不動産南Ｃレジデンス〟の位置を、また画像でマンションの全景をＨＧに見せた。
「そこまで…よくやってくれた」
「はい、ありがとうございます」
ＨＧがＩＡを労うと、ＩＡは喜んだ。ＨＧはＩＡのスマートフォンの画像を見て、
「それしても、いい所に住んで居るなぁ…」
「そうですね」
とＩＡも頷いた。

●作戦会議
ＨＧはマネージャーのＵＫから貰った今までＩＭが住んでいたマンションの位置を書き込んだ地図を見て、それに〝帝城不動産南Ｃレジデンス〟の位置を描き込んだ。それを隣で眺めてたＨＹ達…勝手に〝親父モード〟で話始めた。
ＨＹ「場所に関連性が見えませんねぇ…」

ＴＹ「〝帝城不動産南Ｃレジデンス〟の位置から等距離だと、何かわかりそうですが…ベタですね」
ＨＧ「そうだと良かったが…」
ＩＡ「このＩＭさんの居たマンション…、全部同じ会社の建物ですね」
ＨＧ「ナニ？どうして知ってる」
　ＩＡの話にＨＧ達は驚いた。
ＩＡ「実家のお得意さんにこの会社があって、この会社の経営するマンションは、マンションの名前が会社名に立地する地名を付けて〝会社名・地名・レジデンス〟って名付けますから…ここＹ市にもこの会社のマンションが在りますよ」
ＨＹ「…と言う事は、ストーカー犯も同じ会社のマンションに居ると言う事？」
ＩＡ「そうなりますね」
ＴＹ「そこに関連性が見つけられたけど…決め手に欠けるな」
ＩＡ「あー、でも〝帝城不動産南Ｃレジデンス〟って、会社のオーナー一族が住んでいますよ。確か1～5階は会社のオフィスですし…（と言って、スマートフォンの写真を確認して、ＨＧに見せて）ほら、この様に」
ＨＧ「それかな？オーナーの一族の一人がストーカー犯とすれば、自分の会社の経営しているマンションに入るのは容易かもしれんな。監視カメラに写っていたとしても、観なかったことに出来るかもしれん」
ＨＹ「あり得ますね」
ＨＧ「後は、ストーカー犯がマンションのオーナーの一族であるという証拠があれば…」
ＴＹ「そもそも、なんでＩＭさんが入居するマンションが同じ会社のを選ぶのでしょう？」
ＨＧ「それは、ＭＫ社長に聞いてみないと、分からんな」
　ＨＧはＭＫ社長にこの事を訊ねると、事務所のある建物のオーナーが同じ会社でそこか

らの紹介だと言う事が判明した。その事を知ったＨＧは
「ＩＡお手柄だ」
と言った。ＩＡは「お役に立ててよかったです」と答えた。

「…さて、次の手だ」
とＨＧは、ＨＹ、ＴＹ、ＩＡに指示を出す。
「ＩＡは引き続き、実家に戻り、トラックと人を手配してＩＭさんのマンションに向かってくれ。引っ越しの費用はウチに請求してくれ。必要経費として依頼主に請求する」
とＨＧが言うと、ＨＹは「えげつなー」と言った。ＩＡは嬉しそうに
「はい」
と答えた。
「ＨＹは、〝帝城不動産南Ｃレジデンス〟を張り込んでくれ」
「はい」
「ＴＹは、ＩＡの実家の引っ越し要員に化けて、部屋に入り、部屋に残れ」
「はい」
「そこに、盗聴器を回収しにくるストーカー犯が来ると思われるので、ＩＹと連携して待ち構えて捕まえろ」
「捕獲ですね」
「そうだ、銃は使うなよ」
「はい」
ＨＧは作戦をＩＹに伝えた。

●作戦当日

ＩＭのマンション…

ＩＭのマンションの裏口に引っ越し作業の荷造り要員が集まってきた。その中にＴＹも混じっていた。またストーカー犯も電気工事の作業員の格好で荷造り要員と少し離れた所に居た。それを物陰から伺っているＨＹ。

ＴＹは物陰から合図するＨＹを見つけて「(あれがストーカー犯か…)」と電気工事の作業員を見ていた。

Ｉ運送会社のトラックがそこに到着した。トラックからＩＡが降りてきた。ＩＡがＴＹを含む引っ越し要員の人達に対して、

「では、本日はよろしくお願いいたします」

「「はい」」

と言うと、ＩＡはマンションのエントランスに入り、コンシェルジュに来訪目的を伝えて、ＩＭの部屋に居るＵＫを呼び出し、

「おはようございます！Ｉ運送会社です」

とＩＡが言った。ＵＫがエントランスに来ると、ＩＡに

「ご苦労様です。既に引っ越しの手続きは済んでいますので、裏の荷物搬送用のエレベーターを使って下さい」

と言って、コンシェルジュから入館証を受け取る。それをＩＡに渡し、ＩＡは「わかりました」と言って受け取り、マンションのエントランスを出ると、ＵＫと共に裏口に回り、

「これから作業を始めます。各自マンションの入館証を受け取って下さい」

と言って、手元のボードで引っ越し要員のチェックをして入館証を渡す。その中に先程の電気工事の作業員が紛れ込もうとしたが、ＩＡの顔を見て諦めて立ち去った。それを見ていたＴＹとＩＡ

「姐さん、あいつ（ストーカー犯の事）入館証取りに来たわね」

「図々しい奴だな、そんな姑息な手で今まで紛れ込んで盗聴器回収したり、設置したりしてたんだろうな」
「そうですね…それより、今までの業者はナニ管理してたんでしょうね？」
「そうだね。なにやってたんだか…次は『電気の切断確認です』とか言って部屋に入り込む気かな？」
「准尉はそう読んでいるみたいですね」
「わたしの出番か…」

引っ越し荷物を積んでトラックが出発すると、それを見送ったストーカー犯がＩＭの居た部屋に入って来た。
「いらっしゃ～い」
誰も居ないはずのリビングにＴＹが伸縮式警棒を持って立っていた。
慌てて逃げようとしたストーカー犯が玄関ドアを開けると、そこにはＩＹが居た。
「逃げられませんよ。覚悟してください」
ＴＹとＩＹに挟まれたストーカー犯はその場にへたり込んだ。
ＩＹは所轄の警察署に電話した。程なく到着した警察官に事情を話すＩＹとＵＫ達。ストーカー犯は、住居侵入の疑いで現行犯逮捕され、盗聴器は押収された。
ストーカー犯はマンション管理会社のオーナーの息子で長い事引き籠りをしていた。会社の事務所からオーナーのカードキーを複製してそれで会社の経営するマンションに入り込んでいた。
ストーカー犯はＩＭの熱烈のファンで、家宅捜査に入った捜査員は、犯人の自宅の部屋一杯に貼られたＩＭのポスターとか、週刊誌の切り抜きやグッズ…盗品や髪の毛等も発見した。

取り調べから、今回のＩＭの引っ越しは、親の会社の管理外に引っ越すとの事で慌ててＩＭの引っ越し荷物に何とかして盗聴器を忍ばせようとし、また仕掛けていた盗聴器を回収するために尻尾を出した。

「ＩＹ、ヤッタネ！」

と言って、ＩＭはＩＹにハイタッチをするが、ＩＹは謙遜して、

「いいえ、私一人の力ではありません。ウチの社長（ＨＧ）を始め、会社の人達の協力があればこそです」

「いい仲間よね」

「はい」

●エピローグ

今回のＩＭストーカー犯逮捕により、その後芸能事務所○×エージェンシー社長のＭＫは、碇屋を信頼してＩＭの専属としてＩＹに度々警護依頼をするのと、事務所の他のアイドルやタレント達の警護任務の依頼をしてくるようになった。

その後のＩＹは、ＩＭに対する付きまとい、盗撮、悪戯等をする拗れたファンや同業者からの嫌がらせ等を次々と排除していった。

ＩＭはと言うと、歳の近い信頼できる友人と自分が世間知らずのＩＹに色々教える先生…と言うか妹が出来たような気分で、公私構わずＩＹを呼んでは、街中を引っ張りまわしていた。

相変わらず、リア充でないＩＹにとっては、いい迷惑なのだが、ＩＭから、歳の離れたＨＹ（約２０歳年上）やＴＹ（約１０歳年上）達になかなか聞く事の出来ない事や自分の世代の女性の嗜好について知るいい機会だと思って、嫌々ながらもついて行った。

そのせいか、芸能界について、色々知ることになり、ＩＭのライバルとか、他の事務所の歌手友達とか知る事になり、芸能事務所〇×エージェンシー以外の芸能事務所やプロダクション会社、番組制作会社、テレビ・ラジオ局についての知識もついて、それらに所属する人やモノの警護やフリーアナウンサーとかの警護依頼も来るようになった。

「巻き込まれ親父の警護　＝完＝」